

8

(72)×(11)×1 081

160

20

100

160

7 6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代
遺跡及び木簡出土遺構の概要

(2)・(4)は削屑で、長さ三一・七八mmある。(5)も削屑だが長さ一二五mmあり比較的厚めの削屑である。(2)は直接は接合しない二片からなるが、同一箇と判断した。いずれも文字は判読できない。

9

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成一三
年度(二〇〇三年刊行予定)

中島和彦



(奈良・桜井)

木簡は、東西溝SD二七九〇の最下層から六点出土した。この溝は幅〇・七m以上、現存深さ〇・七m、

○みである。
調査の結果、地山直上の
整地土面で二条の素掘りの
溝を検出した。

調査地は、平城京跡右京六条一坊十三坪の北西隅、薬師寺寺域の西辺にある。今回の調査は駐車場建設に伴うもので、調査面積は

奈良・薬師寺旧境内

所在地 奈良市西ノ京町

調査期間
二〇〇一年(平13)一〇月

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部
発掘機関

調査担当者 作表 金子祐一

貴跡の年代 奈良時

遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平城京跡右京六条

薬師寺中心伽藍に至る寺域内東西道路の南側溝と考えられ、西流しで西二坊大路東側溝の延長上に位置する南北溝SD一七八五に注ぎ込む。両溝は併存し、廢絶は近世に下る。SD一七九〇からは、他に奈良時代から室町時代にかけての軒瓦、室町時代頃の瓦質の擂鉢、江戸時代の土師器（灯明皿としての使用痕跡あり）、漆器椀、灯明皿受台などが出土している。木簡は掲出の一点以外全て墨付きのみの断片である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 十□月八日 〔カ〕
□廿一 ケ度除□□□ (318)×(37)×4 081

中世以降の祈禱札の類と考えられる木簡で、右辺と下端は原形を保ち、右辺上部には切り込みがあった可能性がある。左辺は欠損しており。上端も現状より若干長かったと考えられる。一定期間日光にさらされていたためか、文字が一部白く浮き上がって残り、斜光により釈読できる部分がある。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要』10011 (10011年)
(渡辺晃宏)



奈良・旧大乗院庭園

きゅうだいじょういんていえん

1 所在地 奈良市高畠町

2 調査期間 1100年(平13)10月～1101年1月

3 発掘機関 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 金子裕之

5 遺跡の種類 庭園跡

6 遺跡の年代 古代～近代

7 調査地及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

調査地は平城京跡左京四条七坊東端部にあたる。奈良時代の元興寺禪定院の故地とされ、平安時代後期以降は興福寺の門跡寺院である。上端も現状より若干長かったと考えられる。一定期間日光にさらされていたためか、文字が一部白く浮き上がって残り、斜光により釈読できる部分がある。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要』10011 (10011年)
(渡辺晃宏)

九九五年度以降継続して行なつており、過去にも木簡が出土した（本誌第一二二号）。

今回は西小池北端が想定される北区と、東大池南西部